

「知識人」漱石から「作家」漱石へ —「木曜会」にみる師弟関係の構造と変容—

椎名 健人

はじめに……漱石門弟の評価にみる「作家」漱石史観

明治・大正時代の小説家、夏目漱石の特徴が師弟関係という観点から語られる時には、しばしば師弟の情誼の厚さや門弟に対する漱石の温かな心遣いなどが注目される一方、漱石死後における門弟たちの業績に対する評価はおおむね芳しくないことが多い。

本多顕彰は生前の漱石の元に集った弟子たちを総称して「漱石山脈」と名付けたうえで、彼らの中から漱石に比肩するような有力な作家がほとんど輩出されなかったことを理由に、「漱石山脈」を不毛な「死火山」であったと評している^{*i}。また、大宅壮一はこの本多の論に依拠しながら、作家として成功をおさめた数少ない漱石門弟である野上弥生子のことを、漱石山脈の中で「ひときわそびえ立つ唯一の女性」と称賛している^{*ii}。

本多や大宅の評は「作家」漱石の世代的継承という観点から見た場合、確かにある一面の真実を突いてはいる。だがこれらの論は、門弟たちが受け継ぐべき漱石の資質を、単純に漱石の作家的才能にのみ還元してしまうものであまりにも一面的に過ぎるきらいがある。

後述するように、現在「漱石山脈」の構成員とみなされている門弟らの中には「作家漱石」誕生以前の、漱石がまだ五高教授ないし東大講師であった時代に漱石と知り合った者も多く、この時期のいわば「知識人」漱石に惹かれて門下となった彼らが漱石から吸収しようとしたものが師の作家的才能以外の何かであったことは明らかである。漱石の晩年に弟子となった芥川龍之介や久米正雄ら「新思潮派」の文学者たちが漱石の推挙で文壇に進出するなど、漱石の作家的部分に強い影響を受けたという話は有名だが、彼らが漱石山房の門を叩いたのは漱石がこの世を去る僅か十三か月前のことではなく、数いる弟子たちの中で最も漱石の教えを受けた時間が短かった彼らの存在だけをもって「漱石山脈」の性質を語ることはできない。夏目漱石という人物には、現在広く知られている作家としての顔だけでなく、彼の五十年の生涯のうち実に四十年までを占めた「作家以前」の時期に形成された学者、知識人としての一面があり、漱石が作家として有名になった後に彼と知り合った新しい弟子は前者に、「作家以前」の漱石を知る古い弟子は後者に尊敬の念を捧げたと考えられる。

漱石には「作家」としての顔の他に、「知識人」としての一面があるというこの事実は、しかし現在ではしばしば忘れられがちであり、今日夏目漱石といえはすなわち明治時代の作家であるというイメージが一般には定着している。しかし、日本国内で小説家が権威を獲得していく過程における漱石の位置を考える時、彼の持つ知識人的な属性に光をあてることには重要な

意義がある。

1910 年前後を境に起こる「知識人」として眼差される漱石から「作家」として眼差される漱石への立ち位置の変化は、漱石とその門弟の間の師弟関係に特に分かりやすい形で表れている。漱石の師弟関係を考察することは、日本における小説家の社会的権威がいかに確立したかを考えるにあたっての有用な視点を獲得することにも繋がる。

本稿では、漱石が英国留学から帰国してから死去するまでの 1903 年～1916 年における漱石とその門弟たちの師弟関係を、主に門弟側の置かれていた状況や視点に基づいて考察し、漱石山房の門弟集団が、世代の移り変わりとともに師を「知識人」漱石から「作家」漱石として眼差すようになった背景について、当時の文壇の状況を交えて分析する。

次章では先行研究をレビューしたうえで、本研究の目的についてより詳細に述べる。

第 1 章 先行研究と問題設定

夏目漱石による一連の文学作品は、国文学研究をはじめとする様々な学問領域において、今なお極めて頻繁に研究対象となっている。また夏目漱石個人についても、その人物像に関してはアカデミズムの世界のみならず数々のメディアでも未だに繰り返し取り上げられ、常に世の関心を喚起してきた。いわゆる漱石研究の世界においては、最初の漱石評伝とされる赤木桁平の『夏目漱石』を皮切りに、小宮豊隆による『夏目漱石』など、生前の漱石のもとで学んだ論者が漱石の人物像と作品傾向を結び付けて語る見地から発表した漱石評伝が支配的であったものの、戦後には江藤淳『夏目漱石』、柄谷行人『漱石論集成』など、夏目漱石を明治期の一知識人として捉え、漱石の作品と明治期日本の社会背景を関連づける著作があらわされた他、膨大な資料を元に漱石の全生涯を一日刻みで明らかにする実証的研究（荒正人『漱石研究年表』）も発表されるなど、より多角的な視点から論じられるようになった。

ただし、これらの漱石研究のほとんどは文学研究及び文芸批評の領域に留まっており、社会学の見地に立った分析ではない。

社会学の見地から漱石を扱った研究としては、作田啓一『個人主義の運命——近代小説と社会学』（岩波新書、1981 年）、亀山佳明『「夏目漱石と個人主義」——〈自立〉の個人主義から〈他律〉の個人主義へ』（新曜社、2008 年）を挙げることができるが、こうしたはいずれも夏目漱石の作品についての作品論的分析を入口に個人主義を論じたものであり、本稿が関心を持っているような、文壇における漱石の位置や、周辺人物との関係性を扱ったものではない。

教育社会学の観点からは竹内洋『教養派知識人の運命』（筑摩選書、2018 年）、筒井清忠『日本型「教養」の運命』（岩波書店、1995 年）が、大正期前後の日本における教養主義文化圏の成立と展開を扱う中で、和辻哲郎、阿部次郎、安倍能成らのいわゆる大正教養主義知識人と夏目漱石の師弟関係について言及しているものの、漱石と門弟の関係性の内実そのものについては必ずしも深く掘り下げられているわけではなく、芥川龍之介、久米正雄など教養主義的領域とは直接関係しない漱石門弟に対する言及や分析もほぼ行われていない。

本稿の重要なテーマの一つである小説家の社会的な権威獲得過程に関する理論枠組みの研究としては、P. ブルデュー『芸術の規則』が 19 世紀半ばのフランスにおける文学者たちの分析を

通して今日まで続く、外部から隔絶した自立した独自の価値体系を共有する芸術家たちのサークルを「場」という概念を用いながら明らかにしている。日本においてブルデューの研究に近いものとしては、山内乾史の『文芸エリートの研究』が明治維新直後から昭和初期において文壇内で活躍した作家たちを「文芸エリート」と定義付けた上で、「文芸エリート」たちの出身地、出身階層、学歴などの数量的特性を分析することから近代日本における文芸の性格を明らかにしようと試みているが、この山内の研究はあくまで数量的なものに留まっており、師弟関係をはじめとする文学者たちの具体的な関係性を扱ったものではない。

文学者同士の具体的な関係性を文壇研究的に扱った著作としては、伊藤整・瀬沼茂樹による『日本文壇史』が、文芸批評の立場から当事者の証言や回想を繋ぎ合わせる方法を用いて明治維新直後から1916年12月の夏目漱石死去に至るまでの文壇の実態の網羅的描出に成功しているものの、『日本文壇史』はあくまで文壇内の人間関係、組織関係の叙史的な書き下しに終始したものであり、文壇の社会関係を社会学的に扱った研究ではない。

そこで本稿では、1903年～1916年の間存続した漱石の門弟集団(通称「木曜会」)における師弟関係の質的变化の推移を、主に1910年以前と以後の二つの世代の差異という観点から考察したい。

まず続く第2章で1903年～1916年に漱石のもとに集った門弟らを、漱石との関係を結んだ時期によって「第一世代」及び「第二世代」の二つに区分分けし、それぞれの世代に属する代表的な門弟の人物名など基本的事項を確認したうえで、「第一世代」と「第二世代」それぞれの特徴を、漱石との関係性や漱石死後歩んだキャリアなどに着目しながら紹介し、これらの要素について両世代の間には大きな差異が存在することに言及する。第3章では大宅壮一が提唱した「文壇ギルド」というキーワードを入口に「木曜会」という共同体が持っていた性質を世代ごとに分析し、「第一世代」が持っていた文壇内派閥(≒反自然主義派)としての特質や、「第二世代」の門弟たちの間に萌芽した文学的野心の起源について述べ、「作家」として眼差される存在としての漱石(=「作家」漱石)の誕生にまで至る。

漱石とその門弟との間の師弟関係の質的変遷を明らかにすることは、単に従来の漱石研究に新たな角度からの知見を加えるに留まらず、1905～1910年頃に成ったアカデミズムと結びつく形で文壇と小説家の社会的権威獲得から、1910年代における職業としての作家業の成立という当時の文学の状況を知る上でも有用である。

第2章 門弟たちの世代区分……「第一世代」と「第二世代」 ——漱石山房の新旧ジェネレーション——

本稿における議論に入る前に本稿における「師弟関係」という用語が表わす意味内容について確認しておきたい。

単純に「教える者」と「教えられる者」という関係性を考えるのであれば、まず想定されるのは「学校の先生と生徒」という間柄である。しかし、それだけではあくまで学校制度によって作られた関係性に過ぎない。「師弟関係」といった場合に想定されるのは、「教える者」による体系的な知識や技能の伝達のみならず、それを通して伝えられる師の物の見方、考え方、

時には師の立ち振る舞いや話し方なども含めた、師のパーソナリティと一体化した世界との出会いとして経験されるような関係であると言われる^{*iii}。ここではそのような包括的な関係を「師弟関係」と定義する。

上記のような形の「師弟関係」を漱石との間に結んでいた人々は、その多くが東京帝国大学の学生であり、漱石の英国留学帰国後の1903年から漱石が死去する1916年までのいずれかの時期に漱石宅を定期的に訪問し、文学、芸術などについての議論を漱石と交わすうちに、学校制度の枠外のパーソナルな関係性の中で自らを漱石の弟子であると自認するようになる。

以下、漱石の弟子を、漱石と関係を持ち始めた時期ごとに大きく二つの世代に分類し、それぞれの世代ごとの特色や漱石との関係性を分析する。

1. 「第一世代」(1903年～1910年 一高・東大講師時代)

i. 「作家以前」の漱石門弟

漱石が一高・東大の講師に着任してから修善寺の大患直前までの1903年～1910年は、漱石が『吾輩は猫である』(1905年)を『ホトトギス』誌上に発表して文壇にデビューを果たし、やがて東大講師を辞任(1907年)して専業小説家として生きることを決意した時期にあたる。

この時期には東京帝国大学に在籍していた野間真綱、野村伝四、中川芳太郎、野上豊一郎、小宮豊隆、森田草平、鈴木三重吉、安部能成、阿部次郎などが漱石の自宅を訪問し、漱石と文学に関する議論を交わす、漱石に自作の詩や小説の論評を願い出るなど、大学の外で漱石と個人的な師弟関係を持った。『吾輩は猫である』発表の前後からは漱石宅を訪れる人間の数が一気に膨れ上がり、あまりに頻繁な来客に困った漱石に対して鈴木三重吉が毎週木曜日のみを面会日とすることを提案した^{*iv}ことによって、1906年10月からは後に通称「木曜会」といわれる、漱石と弟子たちの定例会談の場が発足した^{*v}。「木曜会」は1916年に漱石が死去するまでの十年間、絶えることなく存続する。

上で述べたように「第一世代」は漱石の自宅を訪問するという形で、学校教育の枠組みの外部におけるパーソナルかつ濃密な師弟関係を築いた世代であるが、彼らの内、ほとんどは漱石の東大英文科在職中に東大文科にいた学生たちであり、大学で漱石の講義を聴講するのはもちろん、漱石から卒業論文の査読を受けていた者も少なくない。

野間真綱、野村伝四など、この世代で比較的早く漱石と出会った門弟の中には、漱石がホトトギスに『吾輩は猫である』を発表する1905年より前に漱石門下入りした者も多く、『猫』発表後に漱石門下となった小宮、森田、鈴木などにとっても、漱石は当初自らの通学する東大の教員であり、学校教育上の師として現われた。この世代の門弟たちは「作家以前」の、すなわち大学教員としての、あるいは知識人としての漱石に惹かれて彼の弟子になったのである。

ii. 漱石との関係性

修善寺の大患直前の1910年7月に、鷗外は、漱石と門弟らの師弟関係について「師弟の間は情誼が極めて濃厚であると思う」^{*vi}と語っている。当時の鷗外は漱石とは「二度ばかり逢ったばかり」^{*vii}というほどの関係性であり、漱石門弟の中で当時鷗外と面識を持っていたのは森

田草平だけであったが、その鴈外の耳にさえ入ってくるほどに漱石と門弟らの師弟関係の濃密さは広く知られていたということになる。

1906年10月の「木曜会」設置に伴って漱石が木曜日以外の来客面会を全て謝絶するようになったため、一見「第一世代」の門弟たちは全員が漱石との時間を公平に分ち合っていたように見える。が、「木曜会」設立前後の時期における漱石の書簡や門弟らの回想録などを確認すると、「第一世代」の門弟たちが「木曜会」以外の場で漱石を巡る苛烈な総奪戦を繰り広げていたとみられる事例には事欠かない。

例えば、弟子入り前の鈴木三重吉は当時ほとんど面識のなかった漱石に宛てて全長五メートル以上にも及ぶ、漱石の人間性を絶賛した手紙を送りつける^{*viii}ことで一気に漱石の心を掴み、幼くして父と死別した小宮豊隆は書簡上で漱石に自らの「お父っさん」になってくれるよう真剣に懇願して断られている^{*ix}。また、森田草平は自らの身の上に関わる重大な秘密^{*x}を人生で初めて漱石だけに告白し、秘密の共有という形をもって漱石を独占しようとした^{*xi}ことが知られている。

森田草平はこのような弟子たちの漱石への感情を「パーソナルアフェクション」という言葉で表現しつつ^{*xii}、小宮、鈴木らの弟子が漱石のことを「自分の恋人のように思っていた」^{*xiii}と述べる。また小宮豊隆は漱石が『吾輩は猫である』を書きだしてから漱石の弟子となった自分たちの世代(=第一世代)について「猛烈に自己の感情を漱石の上に浴びせかけ、殆んど異性に対する情合のようなものをさえ、漱石に対して持った弟子たち」と書く^{*xiv}など、森田と小宮は共に漱石と「第一世代」の門弟との間に芽生えた関係性を、(単なる師弟の間柄を超えた)ある種の「愛情」(アフェクション)や「恋」という表現を用いて表している。

このように「第一世代」の門弟らは漱石からの承認を目的として、漱石への愛や漱石との関係性の深さを競い合う熾烈な闘争を繰り広げていたが、「第一世代」に属する和辻哲郎は、「第一世代」の作り上げた「木曜会」を日本版的知的サロンであると述べた上で、門弟同士の闘争ではなく、「友愛的な結合」に着目する個性的な分析を行っている。

「漱石を核とするこの若い連中の集まりは、フランスでいうサロンのようなものになっていた。木曜日の晩には、そこへ行きさえすれば、楽しい知的饗宴にあずかることができたのである。が、そこにはなおサロン以上のものがあつたかもしれない。人々は漱石に対する敬愛によって集まっているのではあるが、しかしこの敬愛の共同はやがて友愛的な結合を媒介することになる。人々は他の場合にはそこまで達し得なかつたような親しみを、漱石のおかげで互いに感じ合うようになる。従つてこの集まりは友情の交響樂のようなふうにもなつていたのである」^{*xv}

(和辻哲郎『漱石の人物』)

和辻の論を踏まえて考えるのであれば、「第一世代」の門弟たちは漱石の承認を目的として闘争を繰り広げながらも、一方ではそこに生まれる「敬愛の共同」を媒介とした「友愛的な結合」を育んでいたということになる。

ただし、和辻はこの「結合」の及ぶ世代的範囲についても言及しており、「幾分弟子たちの間

に感情のこだわりができたのは、芥川の連中が加わるようになってからではないかと思う」^{*xvi}とも述べるなど、こういった「木曜会」の特性をあくまで「第一世代」周辺の門弟らに限定している。

「木曜会」内の世代間断絶については他の門弟らも言及しており、「第一世代」の代表的な人物の一人である森田草平は、自分たちの世代の弟子、中でも特に小宮豊隆と鈴木三重吉について「かれらは自分達だけで先生を占有したような気持ちになっていた。切言すれば、自分達だけで占有して、他は寄せつけない、他の寄りつくことを好まないような傾向もあった」^{*xvii}と指摘し、内田百閒など、修善寺の大患以後に「木曜会」のメンバーとなった弟子たちは小宮・鈴木を「畏敬しながらも、内心烟ったく思っていた」^{*xviii}と述べている。また森田は漱石の死後、多くの人間から森田ら「第一世代」の漱石への独占欲があまりに強く、そのせいで若い世代は漱石に近付きにくかったという指摘を受けた^{*xix}と回想している。

iii. 進路と業績……朝日新聞文芸欄・漱石研究・アカデミズム

「第一世代」の残した文学史的、論壇史的インパクトとして大きなものの一つとしては、1909年～1911年にかけて森田草平、小宮豊隆、安倍能成、阿部次郎らが中心となって編集を担当した朝日新聞文芸欄(以下、「朝日文芸欄」)が挙げられる。

朝日文芸欄は当時朝日新聞の新聞記者であった漱石の主宰による欄であるが、実際には発足時から編集権の多くが小宮、森田らの漱石門弟に委ねられていた。朝日文芸欄は当時『三田文学』、『スバル』などの重鎮であった森鷗外から「スバルや三田文学が退治させられそうな勢いである」^{*xx}とコメントされるなど、当時の文壇においても一定の影響力を保持していたが、実際には「文芸欄の性質は文学、美術、音楽、なんでもよし。ハイカラな雑報風なものでも、純正な批評でもいいとして可成多方面にわたって、変化を求めている」^{*xxi}という漱石の言葉通り、扱うジャンルが反自然主義的論調の文芸批評から音楽、絵画、彫刻、建築、能楽の評にまで及んでおり、むしろ論壇的な色彩が強かった。ただし1911年に朝日文芸欄が廃止されて以降は「第一世代」の門弟らが文壇的、論壇的影響力を行使する機会は少なく、僅かに阿部次郎の『三太郎の日記』が一時学生間でベストセラーになった程度に留まっている。

1916年に漱石が死去して以降は、「第一世代」門弟の活躍の場はほぼ完全に文壇的領域を離れ、主に漱石の著作出版や漱石研究の分野に移っていく。漱石の死後程なくして岩波書店によって始められた『漱石全集』の編纂事業において中心的な役割を担ったのは漱石の生前に朝日文芸欄の編集作業の中核として働いた森田、小宮、安倍、阿部ら「第一世代」の門弟であった。特に小宮は後年『夏目漱石』、『漱石の藝術』などの優れた漱石評伝、作品論を発表しており、現在にまで至る漱石研究の礎を築くなど、後世に与えた学問的影響は大きい。彼らの党派的活動は原則として漱石の庇護下、ないしは漱石研究の関連領域に限定されており、「漱石一派」に属することで自然に生じてくる利益の範疇に収まるものであったといえるだろう。

また、この世代の門弟らの中には漱石からアカデミックポストを斡旋されて研究の道に進んだものが多い。後年には鈴木三重吉を除く大多数が大学及び旧制高校の教授職を得ており、小宮豊隆(東京音楽学校・学習院女子短期大学校長)の他にも野上豊一郎(法政大学総長)、安倍能成(学習院院長)など、学長経験者も少なくない。

三好行雄は小宮、阿部らの「第一世代」について、彼らの中からは後に大正教養主義の中核を担うリベラリストが多く生まれたことを指摘している^{*xxii}が、一方で作家として文壇に認められ、後世まで高い評価を得た人間がほとんど存在しないのもこの世代の大きな特徴である。本多顕彰、大宅壮一らが漱石の門弟集団（＝漱石山脈）を不毛な死火山と評する時、主に「第一世代」の作家的業績の不振が念頭に置かれているのは間違いないが、この世代は漱石とパーソナルに結びつき、師への承認そのものを自己目的化する濃密な師弟関係を維持することによって、アカデミックポストをはじめとする種々の経済的実益と自らのアイデンティティの両方を保証されていた集団であり、そもそも作家を志す必然性やインセンティブ自体が低かったことには注意が必要である。

彼らが漱石の作家的側面ではなく、学者的資質や知識人としての面を受け継ぎ、アカデミズムの世界で生きる道を選んだと捉えるのであれば、彼らの中に漱石の弟子たる一面を見出すことは必ずしも難しくない。

2. 「第二世代」（1910年～1916年 修善寺の大患後・専業作家時代）

i. 「作家漱石」の弟子

「第一世代」よりも5年から10年ほど遅れ、修善寺の大患（漱石が1910年6月に伊豆の修善寺で大吐血し、一時人事不省の状態に陥った事件）以降に漱石山房の門を叩いた人間としては内田百閒、和辻哲郎、江口渙、芥川龍之介、久米正雄、岡榮一郎などの名が挙がる。

いわば「第二世代」ともいえるこの世代の弟子にまつわるエピソードとしては、当時東大在学中であった芥川龍之介が同人文芸誌『新思潮』に発表した『鼻』を漱石に激賞され、一躍文壇に進出した話が有名であろう。後でも述べるが、この世代には芥川の他にも作家志望の人間が多く、久米、内田など大正期の文壇において一時期活躍した者もいる。

「第二世代」の門弟らの多くも「第一世代」と同じ東京帝大の学生であったが、彼らが東大に入学した時、既に漱石は東大で教鞭を取っておらず（1907年に辞職）、学校教育上の繋がりほぼ皆無であった。この世代が大学に入る頃には既に漱石は作家として巨大な名声を築いており、「第二世代」の門弟たちが漱石山房の門を叩いた動機も、漱石の小説を読んで感銘を受けた、漱石が自らの憧れの作家であったという「作家」漱石への憧れが多くを占めている。

漱石と学校教育上の関係を持たない「第二世代」にとり、正式な紹介なしには人と会わない漱石に近づくこと自体が非常に困難だったようで、例えば漱石門下に入る前の内田百閒は、憧れの漱石の講演会が行われるとの情報を聞きつけて、講演会出席のために漱石が利用する列車が通過するであろう駅のプラットホームで何時間にもわたって漱石を「待ち伏せ」して失敗している^{*xxiii}他、久米正雄も友人の林原耕三に懇願して漱石山房への紹介を請う^{*xxiv}など、漱石門下入門以前における苦心談の類も少なくない。

ii. 漱石との関係性

前項で述べたように、「第二世代」にとっての漱石は、大学教員でも知識人でもなく、最初から「憧れの作家」、「文豪」といったある種の象徴的な存在として彼らの前に現れていた。

例えばこの世代の代表的な門弟である芥川、内田、和辻などに関する回想録や記録の類に触れると、漱石と出会った当初、彼らが漱石に対していかに大きな心理的距離を感じていたかがわかる^{*xxv}。先述の森田の指摘にもある通り、この世代にとって、「木曜会」の中心メンバーとして幅を利かせる「第一世代」の弟子達、特に小宮豊隆の存在は時に「烟ったい」ものだったようで、内田百閒が小宮の漱石崇拜者の態度を皮肉交じりに「**漱石神社の神主**」とあだ名した^{*xxvi}ことは広く知られている。また江口渙も小宮豊隆のことを、漱石を尊敬するあまり事実の歪曲すら厭わない人間であると強く批判している^{*xxvii}。

後に通俗作家として大正文壇の中核を担った久米正雄は、漱石の門下となった直後に親友の芥川龍之介と師弟関係に関する議論を行った時に表明した「先生」（＝漱石）に対する考えを私小説『風と月と』に書きのこしている。

「僕は、性向も、作品の色合も、先生とは恐らく、殆ど違ふと思うよ。だが、先生の影響下に、只書くと云ふだけで、先生の弟子にならうと思ふんだ。—先生の学問や態度は、目の仇にするわけじゃないが、先輩の弟子たちに任せればいい。だが先生の求めていられるものは僕は決してああ云ふ、夏目型の小学究、先生の態度や、趣味の追従者ではないと思ふんだ」

「そして今、ひそかにさう思ってるのだが、僕は少なくとも『書く』という云うことだけでも先生の弟子にならうとね。僕たちは何も、先生の所へ学問をしに行ってるんじゃない。只、書くと云ふ、興奮を授けて貰ひに行ってるんだとね」^{*xxviii}

久米に限らず、「作家」漱石に憧れて門下となった「第二世代」の弟子たちには作家を志し、また実際にその夢を叶えた者も多い。「第一世代」の門弟とは異なり、漱石の知識人的側面（＝**夏目型の小学究**）に関心を示さない彼らは、主に漱石の作家的側面に憧れを抱き、漱石に自らの作家的資質を承認されることを渴望していた。そういった「第二世代」の野心の結実として表れたのが久米、芥川、松岡、菊池らによる文芸同人誌第四次『新思潮』であった。

第四次『新思潮』立ち上げの瞬間について、久米は以下のように回想している。

「『ねえ芥川！』

私はその時、不意に云ひ出した。実は前々から、さう思ってたに違ひないが、其時天来のやうに、私の頭を掠めて、口に奔った提言だった。

『どうだらう？ 一つ僕たちで、又同人雑誌をやらうぢゃないか。—僕たちの書いたものを、何とか活字にして、せめて先生にだけでも、読んで貰うために。……僕は実は前からさう考へていたんだがね。僕たちは今更、本気になって原稿を書いても、其儘生の原稿で先生に読んで下さい、と持っていくのは嫌だらう。第一それはご迷惑に違いないからね。そして鳥渡吾々の小さな矜りにも係わるからね。何とか活字にして、それとなく持ち込むんだ』

『先生は、読んで下さるだらうかね？』

芥川の顔は、また白く澄んでいた。

『読んでくれると思ふよ』

私は樂觀的だった。

『うむ。読んでくれるだらうね。一やってみようか。又第4次の『新思潮』でも』 *xxix

第四次『新思潮』に掲載された『鼻』が漱石に激賞されたことによって芥川が一躍文壇の寵児に躍り出た話は非常によく知られているが、そもそも彼らが『新思潮』の発行を企図した理由は自作の小説を漱石に読ませるためであった。後に大正時代を代表する作家となる芥川龍之介は、「第二世代」門弟の一員として、この世代が繰り広げた「漱石からの作家的承認をめぐる闘争ゲーム」に参加し、勝利をおさめることで文壇の寵児になったのである。

「第一世代」と同じく、「第二世代」の門弟らの中にも師、漱石からの承認をめぐる闘争は存在した。ただし、これら二つの闘争ゲームに差異を見出すとするならば、「第一世代」の闘争が純粹に漱石からの承認そのものをトロフィーに据えたゲームであったのに対し「第二世代」の闘争がそれよりもやや複雑な様相を呈していたという指摘は可能である。すなわち「第二世代」の門弟らは一見漱石からの承認そのものをめぐる争っているように見えて、その実漱石に承認されることによってもたらされる象徴的な実益、つまり文壇の出世や作家としての地位をめぐる闘争しているのである。

例えば、菊池の自伝的小説『無名作家の日記』の主人公である富井(＝菊池)は、山野(＝芥川)が「×××」(＝新思潮)に発表した小説を「文壇の老大家たるK氏」(＝漱石)に激賞されたのを知り、「俺はもう『万事休す』だと思った」 *xxx というほどの衝撃と嫉妬心を吐露したうえで、さらに次のように書いている。

「もう、彼奴の声価は決った。彼奴が不意に死なない限り、文壇に認められるのは既定の事実だ。俺は、もう仕方がないと諦め始めている」 *xxxi

ここで富井(＝菊池)が山野(＝芥川)に向ける嫉妬心は、「文壇の老大家」(＝漱石)からの承認ではなく、その承認の裏側に貼り付いている文壇からの承認である。

芥川が『鼻』を漱石に激賞された際のエピソードは久米の『風と月と』にも存在する。中でも芥川が漱石から激賞の手紙を受け取ったことを知らされた直後の久米が、松岡の元を訪ねて会話するシーンは象徴的である。ここでも話題の中心にあるのは「先生」(＝漱石)ではなく、明らかに「文壇」である。

「『その夏目先生の手紙、此の次の新思潮へ、公表できないかな？……さうすれば、間違いなく芥川は文壇に出て行くと思ふんだけど。……』

『さア、それやア難しいだらうな。一だが、そんな事をしなくたって、是で確実に芥川は文壇に出て行けるよ。』

『それはさうだな。さうして芥川が先生に認められて、文壇に出て行くとすれば、新思潮の所期の目的を、先づ最初から、見事に達した譯だから、何よりも喜ぶべき事だな。』

『さうだ。何よりも大盃を學べて、祝すべき事だよ。』

私も、やうやく眉を開いて、さう云うことが出来た。

『そして、芥川が認められれば、続いて誰かが、又必ず認められるに相違ない。何故と云ふ

と、僕はかう思ふんだよ。或る無名の文學グループがあつて、其中の一人が、認められるとすると、その認められた奴と、少なくとも対等に付き合いの出来た奴は、いづれ又必ずいつか、実力を認められるに違ひないんだ。だから、僕たちの中からでも、先づさし当り芥川一人が出れば、続いて……例へば君、それから成瀬、と云つた風に、認められるに違ひない。』」*xxxii

これらの記述からも読み取れるように、彼らにとって師による承認はそれ自体一つの目的ではあるものの、その先には文壇からの承認という大目的が据えられているとも考えられ、この点については「第一世代」の価値観とは異なっている。

iii. 進路と業績―「知識人」漱石と距離を置く作家集団

「第二世代」の門弟らは漱石の死後、作家の道を選んだ者が多く、和辻哲郎を除いてアカデミズムの世界に進んだ者はほぼ皆無であるなど、その傾向は「第一世代」とは大きく異なっている。

単に創作志向、作家志向が強いだけでなく、いわゆる学問的業績や研究者自体の威信に対してしばしば否定的態度を取るのもこの世代の特徴であり、特に「新思潮派」の芥川、久米らは学生時代から当時の東大英文科教員、ローレンスや京大英文科教員、上田敏に対して強い侮蔑的態度を繰り返し表明している*xxxiii。

ただしこの世代からアカデミズムの道に進んだ者が極めて少数である理由を、本人たちの価値観にだけ帰するのはやや一面的であろう。先述のように「第一世代」の門弟の中には漱石の斡旋によって大学の教授職をはじめとするアカデミックポストを得た者が少なくないが、「第二世代」の人間で漱石からアカデミックポストを与えられた人間はほぼ皆無である。彼らが大学や高等学校の研究職の道に進むことは、たとえ彼らがそれを望んだとしても、必ずしも容易ではなかったのである。

この世代からは後年に「新思潮派」として文壇で一時代を築いた芥川、久米らの他にも内田百閒、江口換などの個性的な小説家が輩出され、大正期の文壇においては一定の活躍を見せてはいたが、現在に至るまで高い評価を受け続けているのは芥川のみに残り、「新思潮派」を除いては党派的な活動の類も活発ではない。

本章ではここまで、漱石門弟の「第一世代」と「第二世代」それぞれの特徴を扱い、二つの世代間に横たわる差異について確認した。

表 1 漱石門弟「第一世代」及び「第二世代」
師弟関係の特徴と差異

	第一世代	第二世代
漱石との関係性	パーソナルかつ濃密	心理的な距離感あり
漱石からの就職補助	アカデミックポストの斡旋	原則としてなし
漱石への感情	漱石の人間性及び 教養への尊敬	「作家」漱石への憧れ
主な進路	大学・旧制高等学校の 講師・教授など	小説家・劇作家
世代内闘争の性質	漱石からの承認を巡る闘争	漱石からの承認に 付随する文壇からの 承認をめぐる闘争

次章ではこういった師弟関係の変容を、その背景にある文壇全体の性質の変化という観点から捉えた場合どのような解釈が可能かについて、主に「文壇ギルド」、「文学的野心」といった切り口から考察する。

第3章 「木曜会」の構造と変容

i. 「文壇ギルド」という観点

大宅壮一は1926年に発表した評論『文壇ギルドの解体』において、大正時代までの日本文壇の一般的性質を「ギルド」という用語を使って説明している。

「まず第一に気付くことは、『実業界に出る』という言葉と、『文壇に出る』という言葉との間に、確然たる相違の存することである。(中略)後者はいくらか封建的余裕を有し、一度出てしまえばある程度まで生活が保証される一種の社会群、すなわちギルドの親方の仲間入りをすることを意味する。なんとすれば、芝居を作ったり小説を書いたりすることは、多年その道の修業を経たものでなければ、『素人』ではちょっと手が付けられぬことであり、その結果彼らの集団、すなわち組合はある程度まで市場を独占できるからである」

「第二に(中略)『素人』の作品は大部分黙殺される。(中略)反対に彼らの仲間の作ったものは、それが第三者の目から見てどんなにつまらないものであっても、そこに何らかの『うまみ』を発見することを決して忘れない。こういうふうにして外来者の侵入を防止することは、『ギルド』に特有な現象であって、その警戒を怠るときは、長年彼らの独占にゆだねられてきた市場が、たちまちかき乱される恐れがあるからである」

「第三に、いまなお徒弟制度の(外形は多少違っていても)の存することである。(中略)『有名』になった者同士が互いにほめ合い、問題にし合って『有名』を維持していく。『先生ぼめ』、『弟子ぼめ』、『仲間ぼめ』といったような批評界の常套語が、この間の消息を雄弁に語っている。とにかく文壇というギルドに仲間入りするためには、賞賛に値する作品を書くまえに、まず賞賛してくれる先輩なり仲間なりを持つ必要があるのである」*xxxiv

以上の大宅の記述から見えてくる「文壇ギルド」の定義は大きく分けて「1. 市場独占力を背景にしたギルド成員の生活保障」、「2. 外部の排除」、「3. 徒弟制度」の三点である。大宅はこのような特徴を持つ「ギルド」が日本文壇に成立した当時の時代とグループについて、以下のような解説を加えている。

「明治維新とともに生まれ出たわが国の資本主義が、日露戦争の刺激に合い、封建時代の殻から蟬脱して世界の市場に活躍しはじめたころ、日本文壇の大棟梁尾崎紅葉出でて、硯友社一派の文壇ギルドが確立し、ついで世界戦争の影響を受けて日本の資本主義がようやく爛熟の域に達してきたとき、親方漱石の庇護のもとに、今日の文壇を担って立っているところの幾多の新人が輩出して、文壇ギルドはここに完成の域に達した」*xxxv

ここで「文壇ギルド」の具体例として示されているのは、尾崎紅葉の硯友社と漱石の「木曜会」グループの二つである。日露戦争前後から漱石の死去までが文壇ギルドの成立期だとする大宅の論に従うならば、対露強硬論の高まりつつあった 1900 年前後から尾崎紅葉が死去する 1903 年までは硯友社が、漱石の英国留学帰国から死去までの 1903 年～1916 年までは漱石の「木曜会」が文壇ギルドの基礎を作ったということになる。

しかし大宅の論の中では全く同質なものとして扱われている紅葉の硯友社と漱石の「木曜会」の間には、実際には少なくない差異が存在する。また、ここまで触れてきたように漱石の「木曜会」についても、1903 年～1910 年前後までに門下となった「第一世代」とそれ以降に門下となった「第二世代」の間ではその性質は大きく異なっており、これら全てを「文壇ギルド」の一言でくくる大宅の論にはやや粗さが目立つと言わざるを得ない。

硯友社、漱石門弟「第一世代」、漱石門弟「第二世代」はいずれも一見「ギルド」的な色彩を持つ共同体でありながら、一方では互いに大きく異なった特質を持っている。本章では、微妙に異なった時代に発生した複数の文学者の共同体の間に、なぜそのような差異が生まれたのかを分析することによって、前章までに取り上げた「第一世代」と「第二世代」の差異の要因を、日本文壇の共同体的特質の変遷というレベルにまで還元して考察する。

そこで、まずは大宅の例示したグループの中でも最も「ギルド」的特質が強いと思われる硯友社の性質について具体例や証言を元に検討し、文壇内における「ギルド」の様態について確認しよう。

ii. 尾崎紅葉の硯友社―「文壇ギルド」の理念型

確認すると、硯友社とは1885年に当時東大予備門の学生であった尾崎紅葉が山田美妙、石橋思案らと共に立ち上げた文学結社である。山田美妙の離脱や紅葉の文壇的出世などに伴い、1890年以降の硯友社は紅葉を中心とする文壇内の一大勢力になっていく。当時の硯友社では多くの小説家志望の門下生が住み込みで働き、朝晩の掃除はもとより、原稿の清書、玄関番、客の取次ぎ、薪割り、紅葉の弓道や風揚げの補助に至るまで、ありとあらゆる雑用をこなしていたという^{*xxxvi}。代表的な紅葉門弟として知られる泉鏡花は、紅葉門下での生活について

「お小言は随分厳しい方でした。馴れないものは余り厳し過ぎはしないかと思ふ位だったでせう。(中略)小言なり、仕付けなりが厳格ですから、始めから真底崇拝して薪を切り水を汲む考へのものでなければ続かなかったのです(中略)文章の上ばかりではなく其の日常に於ても間拔けた事をやればそれは手厳しい剣突を喰ひました」^{*xxxvii}

とその厳しさを回想する一方、自らに新聞小説の仕事を与え、小説家として生きる道を作ってくれた紅葉に対して、崇拝にも近い感謝と尊敬の念を抱いていた。

里見弴は鏡花の紅葉崇拝について以下のように述べている。

「鏡花は、『師を敬うこと』文字通り『神のごとく』で、二階の八畳なる書斎の違ひ棚には、常に紅葉全集と、キャビネ型、七分身の写真が飾っており、香華や、時には到来の名菓とか、新鮮な果実とかの供えられているのを見かけることもあった。たぶん、朝夕の礼拝も欠かさなかったことだろう。みだりに話頭に登せず、語る場合は『横寺町の先生』と呼んだし、式服の紋には、源氏香の図のうち『紅葉もみじの賀』を用いていた。目前に見られる師弟の情誼の、おそらくはこれが最後のものだろうと思われ、私の性分としては、批判を絶した敬虔の気に撃たれた」^{*xxxviii}

ただし硯友社の門弟らと紅葉の師弟関係を考えるうえで鏡花の例のみを参照する態度はややバランスを欠く。実際、もう一人の代表的な硯友社出身作家、徳田秋声の師、紅葉に対する態度は多くの面で鏡花のそれと対照的である。

「秋声老人は『僕は実は紅葉よりも露伴を尊敬していたのだが、露伴が恐ろしかったので紅葉の門に這入ったのだ』といていたが、同じ紅葉門下でも、その点鏡花と秋声は全く違う。(中略)或る時秋声老人が『紅葉なんてそんなに偉い作家ではない』という、座にあった鏡花が憤然として秋声を殴りつけたという話をその場に居合わせた元の改造社長山本実彦から聞いたことがあるが、なるほど鏡花ならそのくらいなことはしかねない」^{*xxxix}

(谷崎潤一郎『文壇昔ばなし』)

入門以前も以後も紅葉に対してさほどの尊敬の念を持っていなかった秋声が、そもそもなぜ硯友社に入ったのかを考えてみると、そこからは人格的崇拝を基調とするパーソナルな師弟関

係である紅葉——鏡花のモデルとは異なる、硯友社の師弟関係のギルド的側面が浮かび上がってくる。秋声が硯友社に入ったのは、明らかにそれが彼自身の生活保証と作家的キャリア構築のための最も効率的な手段だったからである。

例えば鏡花は紅葉について以下のようにも述べている。

「御自分が一旦お引受けになった以上は何処までも其の人間を一人前に仕立てて遣らう、飽くまでも仕込んだ其の上で若し出来損って方向に迷ふやうなことがあったらその上は仕方がない、ものにならないなら例へ焼芋屋、おでん屋であらうと店を持たせて喰う道だけは授けてやらう、若し当の相手が稼人で内が困るなら親達にまでもひもじい思いはさせまいという親分気質ですから」^{*x1}

硯友社における紅葉のカリスマ性を本質的な部分で支えていたのは彼自身の人格的な魅力よりも、むしろ上の引用文からうかがえる、ギルド成員への手厚い生活保障、キャリア保障であった。

住み込みでの雑用業務に代表される厳しい徒弟的制度や、それと表裏一体を成す門弟への手厚い生活保障、キャリア保障など、この時期の硯友社の特性はいずれも大宅壮一の提唱した「文壇ギルド」の三条件に合致しており、いわゆる理念型の「ギルド」に近い存在だといえる。

ただし、次項で扱う漱石門弟の「木曜会」の性質からは、硯友社的なギルド性から離れた部分が観察され、必ずしも大宅のいう「文壇ギルド」の形態とは一致しない部分が少なくない。

iii. 漱石門弟「第一世代」—「ギルド」から「サロン」へ

漱石門弟「第一世代」もまた漱石宅を訪問し、漱石という絶対的な一人の師と私的な繋がりを持つ中でそれぞれ漱石から様々なものを学んだという意味においては、一見紅葉を中心とした硯友社内部の人間関係に近いように思える。実際、この世代は先述のように漱石主宰の朝日文芸欄の編集を委任されて一時期論壇の一派としてみなされたり、漱石の紹介によって大学講師、高等学校講師の職を得る、漱石死後には漱石全集編纂の中心として活躍するなど、明らかに漱石の門弟集団に属することによる経済的利益(≒生活保障)を享受している世代である。また、先に紹介した森田の回想からもうかがえるように、この世代と漱石が形成する共同体は外部の人間が容易に入り込めない一種の排他的性格をも有するなど、漱石門弟「第一世代」もいくつかの点では硯友社的な「文壇ギルド」に類似した性質を残している。

しかし漱石門弟による「木曜会」は和辻の「サロン」^{*x1i}という言葉が表しているように、メンバーほぼ全員が東京帝大の学生という知的エリート集団である点で硯友社と決定的に異なる。漱石門弟「第一世代」と漱石が織りなしていた共同体(=木曜会)は、硯友社の徒弟制度とは似て非なる個人主義的な知的サロン集団である。

「第一世代」が漱石の元に集った1903年～1910前後における文壇の中心人物の経歴を確認すると、東大講師として英文学を教えていた漱石の他にも、鷗外が慶応義塾文学科の顧問、島崎藤村が小諸義塾の英語教師、永井荷風、上田敏はそれぞれ仏文学、英文学の教授であるなど、彼らは皆一様に作家であると同時に外国語の学者や教師としての肩書を持っていたことがわか

る。三好行雄はこの点に注目して日本の近代文学が、西洋の言語を学ぶ知識人たちの努力によって成立したものであること、またそのようにしなければ成立し得なかったことに言及している。

「逍遙が『小説神髓』を書いたとき、この先駆的な文学論によって理念としての小説様式はいち早く成立したが、日本語で書かれた小説はまだどこにも存在しなかった。逍遙は西洋を見ながら、その西洋のめがねで江戸の浮世草子を見なおすよりしかたなかったのである。おなじ事情は鴎外や二葉亭にもあてはまる。かれらは無から有を生み出すために、刻苦して西洋を学ばねばならなかった。日本の近代文学を主導した知識人たちは、みな例外ではない。その系譜は明治 40 年代の漱石や荷風にまで辿れるが、かれらは小説家であると同時に学者であり、教師であることを強いられたのである。みづから学びながら、学ぶことで、後続する世代へのかけがいのない師であらねばならなかった」*xlii (三好行雄『近代文学史の構想』)

「木曜会」成立の前後には、島崎藤村らの自然主義派を中心とする「龍土会」、荷風ら耽美主義的芸術家を中心とする「パンの会」など、文学傾向の異なる様々な知的サロンが並立しており、三好はこのような明治四十年前後の状況を「サロンの季節」と形容している*xliii。これらのサロンは、各派の派閥としての体力を下支えする社会関係資本構築の場となり、自然主義——反自然主義の論争をはじめとするこの時期の様々な文学論争のベースとなった。

「木曜会」の「第一世代」門弟らが漱石門下集った時期は漱石、鴎外、藤村、荷風、敏ら西洋の言語や思想を学んだ学者、知識人がそれぞれのアカデミズム的知見をもとに日本の近代文学を成立させていた時代に当たる。こうして文壇とアカデミズムが結びつく形で小説家の権威が確立されつつあった当時に、「木曜会」とそこに集う「第一世代」の門弟らが果たした役割もまた、「知識人」漱石を中心に据えた論壇の一派、あるいは文壇内の一派閥としての機能であったといえる。

iv. 漱石門弟「第二世代」——「作家」漱石と文学的野心の誕生

漱石門弟「第二世代」もまた、外部を寄せ付けない排他的な共同体の中で、漱石と(徒弟制とは似て非なる)「知的サロン」的共同体を形成していたという点では「第一世代」に近い。ただし「木曜会」における後発世代であり、漱石との学校制度上の繋がり(教師と生徒の関係)を持たない彼らの多くが、漱石門下への入門前後に漱石との心理的距離を感じていたことは前章でも述べた通りである。「第二世代」の門弟たちは、「木曜会」の一員として外部を寄せ付けない排他的なグループを形成する一方、「木曜会」の内部ではむしろ疎外感を感じさせられる側としてある種の外部性を引き受けるという複雑な二面性を持つ集団である。

またこの世代には、漱石からアカデミックポストなどの就職斡旋を受けた人間も少ない。彼らは漱石を中心とするグループには所属しながらも、グループ内の後発集団として劣位に置かれ続けたために、「第一世代」が享受していたもの、すなわち漱石グループに属することで得られる種々の利益分配からこぼれ落ちてしまった。先に挙げた大宅の三条件に照らしても彼ら「第二世代」からはほとんど「ギルド」性は観察されないといってい

また「第一世代」と異なり、「第二世代」には朝日文芸欄ほどの強力な論壇的な拠点がなかったこともあり、党派的に論壇を形成するような動きに乏しく、むしろ積極的に小説を発表することによって作家として文壇に認められることを志向するようになる。このことを考える上では、彼らが漱石門下に入った 1910 年代半ばには、漱石、鷗外、藤村、荷風、敏ら西洋の言語や思想を学んだ知識人によって小説家という職業が既にある程度の権威を獲得していた点に留意する必要があるだろう。この頃の主流として「第二世代」門弟たちの目をひいたのは、アカデミズム的知識人と結びついた論壇的空間よりも、むしろ『白樺』や第二次『新思潮』といった学生同人誌から輩出される谷崎潤一郎、志賀直哉などの有力な新進作家の文壇的出世であった。

谷崎、志賀などが次々に文壇に進出した 1910 年前後の状況について、三好は以下のように述べている。

「(前略)こうして先の比喻でいえば、教師から小説家への世代の移行がある。明治 43 年に刊行された『新思潮』(第 2 次)や『白樺』に拠る新人作家たち、たとえば谷崎潤一郎や志賀直哉にとって、小説はすでに自明の形式として眼前にあった。小説のはらむ無限の可能性をうたがう必要はもうない。かれらは学者でも翻訳家でも、まして教師でもない、他のなにものでもない小説家として自己を出発させる」*xliiv

漱石、鷗外、荷風、敏などの知識人が小説を執筆したり、文芸雑誌の編集を行うことによって、アカデミズムと接近する形で権威を獲得していった日本文壇の土壌は、西洋文学に関する深い専門知を有さない学生が西洋型近代小説を書くことをも可能にした。三好が言うように日本で初めて「他のなにものでもない小説家として自己を出発させ」た書き手である谷崎や志賀、特に東大の先輩である谷崎の存在が「第二世代」にとっていかに大きいものであったかは、久米が第四次『新思潮』の立ち上げ時に、『新思潮』の看板を引き継いだ理由として

「彼の『刺青』を引っ提げて、前々代の『新思潮』に登場し、一読鷗外や荷風を三嘆せしめた谷崎潤一郎の例は、そう無暗には無い異例だとは知ってゐ乍ら、内心多少希みが無い譯ではないと思はれていた。せめてその余沢に、あやかりたいと思へばこそ、彼らの後を嗣ぐ意味の『新思潮』を敢て名乗ったのだった」*xlv

と、極めて率直に谷崎への憧れを表明していることから明らかである。「第二世代」としての漱石からの承認が、その裏に貼り付いている文壇からの承認のための手段という意味合いを含んでいたことは既に第 2 章で述べたが、そもそも彼らがなぜそのような文学的野心(=文壇からの承認欲求)を抱いたのかと考えた時、その理由の一つとして谷崎を媒介とする「欲望の模倣」的現象を考えることは可能だろう。事実、芥川、久米などと一高時代に同級生だった菊池寛は、自伝的小説『無名作家の日記』の中で、芥川や久米らと共に谷崎潤一郎(『無名作家の日記』の作中では川崎純一郎)への憧れを語り合う場面を描いている。

「高等学校にいた頃、寝室で皆が一緒に枕を並べて寝る時は、文壇についての話のほかは、ほとんどなにもしなかった。ことに、川崎純一郎氏の活躍ぶりが、よく我々の話題となっていた。川崎氏は、俺たちにいちばん近い目標であった。あの人の眩しいほどに燦然たる出世が、その頃の俺たちの心を、どんなにそそっただろう」*xlvi

谷崎の文壇的出世が「そそった」ものが、芥川や久米、菊池らの文壇への出世欲という文学的野心だとするならば、「第二世代」門弟らの文学的野心の起源を、谷崎、志賀ら文壇における先行世代の存在に求めることは可能である。

「第二世代」が漱石門下に入った1915年前後は、『白樺』や第二次の『新思潮』などの東京帝大における学生同人出身の本来高学歴なはずの書き手たちが、しかし必ずしもアカデミアにおいて学問的蓄積を多く積み上げないまま直接的に作家業を営み始めるというキャリアコースを創り出していた時期にあたる。

こういった同時代的状況の中、職業としての作家業に対して徐々にリアリティを感じる事が可能になり始めていた「第二世代」は、漱石の魅力を「豊かな学識を誇る知識人」ではなくむしろ「成功した作家」であることに見出した。

ここでもう一度、久米が芥川との対話の中で表明した、先生(=漱石)に対する考えを引用する。

「僕は、性向も、作品の色合も、先生とは恐らく、殆ど違ふと思うよ。だが、先生の影響下に、只書くと云ふだけで、先生の弟子にならうと思ふんだ。—先生の学問や態度は、目の仇にするわけじゃないが、先輩の弟子たちに任せればいい。だが先生の求めていられるものは僕は決してああ云ふ、夏目型の小学究、先生の態度や、趣味の追従者ではないと思ふんだ。僕から云はせると、先生は其点で、あの先輩弟子たちに、絶望してるんじゃないか、と、さへ思ふんだ。だからそれを乗り越えて、本当の先生の弟子にならなくちゃならん。いや、なりたいたいと思ふんだ」*xlvi

(久米正雄『風と月と』)

漱石の魅力を、何より作家としての力量に見出していた「第二世代」にとって、「本当の先生の弟子にな」るとはすなわち「夏目型の小学究、先生の態度や、趣味」といった不純物を切り捨てて「書くと云ふだけで、先生の弟子になる」こと、ひいては自らの書いた作品を漱石に承認されることを意味していた。こうした彼らの理念が最も具体的な成果物の形で表われたものの一つが第四次『新思潮』同人である。「第二世代」は原則として漱石から自らの作品を承認されることを通して作家的成功を掴みたいという目的意識(=文学的野心)を軸に師、漱石との距離を決定しているものの、同時にこのようなある意味打算的とも取れるような自分たちの態度を、却って「作家」漱石の本質と純粋に向き合う倫理的な振る舞い(≡「書くと云ふだけで先生の弟子にな」る)であると自ら捉えている節がある。

「木曜会」の「第一世代」と「第二世代」の間に横たわる漱石観の移行——「知識人」漱石から「作家」漱石——は主に『白樺』、第二次『新思潮』などの学生同人出身作家の誕生とそれに伴う「職業としての作家」イメージの強化という外的要因によって引き起こされた。そし

てこの移行は必然的に門弟たちが師、漱石に求める「承認」の質をも変化させる(人格への承認から作品への承認)結果を招いた。

では、「知識人」漱石から「作家」漱石へと門弟の眼差しが移行したことによって、師弟関係のあり方は具体的にどのような変容を遂げた、或いは遂げざるを得なかったのか。次項では「第二世代」の門弟と漱石との関係性について、作家同士の師弟関係という観点から考察する。

v. 作家同士の師弟関係—ジレンマと回避戦略

「第二世代」の門弟たちが、漱石の作家的側面を尊敬しつつ自らも文壇に進出していった世代であることは既に前章で述べたが、いざ文壇に進出した彼らが一人前の作家として文壇内でさらなる成功を収めたいと望んだ時、そこに立ちはだかったのは「作家同士の師弟関係」の持つジレンマであった。

例えば芥川は、遺稿の一つである断章形式の自伝的小説『或阿呆の一生』の中で、「先生」(＝漱石)との関係性について、「夜明け」という章を割いて次のように描いている。

「夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に広い市場を見渡してゐた。市場に群むらがつた人々や車はいづれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の巻煙草に火をつけ、静かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかった。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸が一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年、——先生に会つた三月目だつた。」*xlvi

芥川の「木曜会」初出席が1915年11月であり、漱石が芥川の『鼻』を激賞したのが1916年2月であることを考慮に入れるならば、「先生に会つた三月目」のことを描いたこの章が、芥川自身の文壇(＝市場)進出時の心象風景を描いたものであることはすぐに理解できる。ここで師、漱石の姿は「彼の真上に」輝き、彼(＝芥川)をあるべき方向に導いてくれる「星」として表象されており、良好な師弟関係がうかがえる。

しかし、芥川が作家として独り立ちした後の1916年12月に訪れた漱石の死を描く第十三章「先生の死」では、芥川のより複雑な対漱石感情が吐露されている。

「彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラツトフオオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。プラツトフオオムの向うには鉄道工夫が三四人、一斉に鶴嘴を上下させながら、何か高い声にうたつてゐた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は巻煙草に火もつけずに飲みに近い苦しみを感じてゐた。『センセイキトク』の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が一行、薄い煙を靡かせながら、うねるやうにこちらへ近づきはじめた。」*xlix

ここで表明される「飲みに近い苦しみ」とは何か。芥川は漱石死没直後に発行された1917年

の『新思潮』第二年第一号誌上で、自らの心境を次のように述べている。

「僕一身から言うと、ほかの人にどんな悪口を言われても先生にほめられれば、それで満足だった。同時に先生を唯一の標準にすることの危険を、時々は怖れもした。」*1

漱石からの承認を全てとみなすほどに強烈な師への傾倒は、しかし、芥川という作家を単なる「師、漱石の小型」にしてしまう危険と隣り合わせであった。作家の世界においては、ひとたび文壇に出れば師も弟子も対等な競争相手である。師、漱石への過度な傾倒(=先生を唯一の標準にすること)が、時に自らの作家的個性を削り取る刃にも成り得るという危険を熟知していたからこそ、芥川は漱石の死没時に「歎びに近い苦しみ」、すなわち師の重圧からの解放感を強く感じたのであろう。

師、漱石への傾倒が、かえって自らの作家性を削り取る結果を招くというジレンマは、芥川に限らず、作家として文壇での出世を志した「第二世代」の門弟にもれなくつきまとった矛盾であった。このジレンマを処理するための回避戦略が読み取れるのが、次に示す芥川の発言である。

「夏目先生の僕らに感じさせる偉大さは、結局、あの大きな作家性と云ふか、作家たる事にある、と思ふんだよ。それやア学問的な点から云っても、亦文学的な傾向から云っても実に僕に取っては、鴎外さんの方が、ずっと吾が師匠だと思ってゐるんだよ。だが、作家と云ふものの、持ってゐる温い影響力と云ふものは、比べものにならん程、夏目先生の方が大きいからね。」*1i

(久米正雄『風と月と』)

ここでは漱石を「作家」漱石として眼差した芥川が、具体的に「作家」漱石のどのような部分を尊敬していたのかについての言及がなされているが、その表現はどれも極めて曖昧かつ難解である。文学的な傾向についてはむしろ鴎外の方が師に値すると言い切ったうえで持ち出される「大きな作家性」、「作家と云ふものの、持ってゐる温い影響力」といった煮え切らない表現の数々からは、漱石の存在を「作家」という抽象的な一般名詞に還元し、その具体的な作家的個性については極力言及を避けようとする芥川の態度が見え隠れする。

芥川は師、漱石の影響力を「大きな作家性」(具体的にどのような「作家性」なのかについての言及は一切ない)という、ほとんど実質的な意味内容を伴わない抽象的な範囲に留め、師の作家的個性を隠蔽することによって、師の作家的個性に自らの作家的個性を削られる事態を回避しようと試みたのである。

そのように考えるならば「第二世代」の門弟から、「第一世代」の小宮豊隆のような本格的な漱石研究者が一切現れなかったことも頷ける。作家「漱石」を師と仰ぐ「第二世代」は、一方で漱石の具体的な作家的個性や文学的傾向についてあえて隠蔽することによって、師弟関係と自らの作家的個性の両立を図ったのである。

vi. 結論

漱石門弟の「第一世代」と「第二世代」の間に横たわる、漱石との師弟関係やキャリアの差異を当時の文壇的状况を背景に検討すると、まず「第一世代」が漱石の元に揃い始めた1905年～1910年頃の文壇においては、漱石の他にも鴎外、荷風、藤村、敏など、外国語文学の学者・知識人が多くを占めていることが観察された。この時期は西洋に学んだ知識人の活躍により、アカデミズムと接近することで日本の文壇、そして小説家が社会的な権威を獲得しつつあった期間にあたり、これらの知識人の一人として文壇の地位向上に貢献した漱石の元で論壇的な言語空間を形成していた「木曜会」の「第一世代」門弟たちが果たした役割もまた、「知識人」漱石を中心に据えた論壇の一派、あるいは文壇内の派閥としての機能であった。

本多、大宅らの文芸批評家は「第一世代」の中から有力な作家が輩出されなかったことを批判して、漱石山脈は不毛な「死火山」であったなどとする見解も示すが、この世代は多くが漱石からアカデミックポストを斡旋されるなど、漱石からの承認さえあれば物心両面共に不足ない人生をおくることのできた集団であって、そもそも作家を志す必然性自体が弱かったと考えられる。

一方「第二世代」門弟が漱石の門弟となった1910年代前半は、日本において小説家が社会的権威を獲得していた時期にあたり、第二次『新思潮』、『白樺』などの文芸同人誌から文壇に進出した谷崎潤一郎、志賀直哉などの若い新進作家が「第二世代」の文学的野心(＝文壇からの承認欲求)を呼び起こすという状況が存在した。加えて「木曜会」内部における後続集団である「第二世代」は漱石との師弟関係のパーソナルな濃密さにおいて先行する「第一世代」よりも劣位に置かれていただけでなく、漱石からアカデミックポスト斡旋などの生活保障をほとんど得ることができず、単に漱石からの承認を求めるだけでは自らのキャリアを切り開くことができない状況に置かれていた。そのような状況下で、彼らが自らのキャリアを切り開くために採用した戦略が、彼ら自身の文学的野心を満たすための世代内闘争であった。

作家としてのキャリアを歩むことを選んだ「第二世代」門弟たちは、作家として漱石に承認されることを渴望しながらも、一方では自らの作家的個性を守るために、漱石の過度な影響から逃れる必要があった。そのために彼らは漱石の具体的な作家的特徴からあえて目を逸らし、尊敬の対象としての漱石を、「優れた作家」(ただしどのような点で優れているのかにはあえて言及しない)という象徴的な存在の範囲内に封じ込めることで、漱石との師弟関係と自らの作家的個性を両立させる戦略を取ったとみることができる。

おわりに

本稿が対象とした時代は主に1903年～1916年頃であったが、1916年には漱石の死の他にも、上田敏の死、鴎外の断筆、荷風の『三田文学』主筆辞任などの出来事が立て続けに起こっており、明治期の文壇を支えた基盤的人物の多くがこの年一斉に文壇の中心から去っていることがわかる。続く1917年以降本格的に始まる大正文壇の時代において、作家たちの関係性やそこに占める師弟関係の質や重要性はどのように変容していくのか。この時期に文壇の覇権を握ったとされる白樺派^{*1ii}の作家たちをはじめとする大正期の作家についての検討が重要になってく

と思われる。今後の課題としたい。

脚注

- *ⁱ 本多顕彰『孤独の文学者』（八雲書店、1947年）71頁。
- *ⁱⁱ 大宅壮一「野上弥生子と漱石山脈」、『大宅壮一全集第14巻』（蒼洋社、1980年）所収。273頁。
- *ⁱⁱⁱ 稲垣恭子『教育文化を学ぶ人のために』（世界思想社、2011年）248頁。
- *^{iv} 『夏目漱石周辺人物事典』（笠間書院、2014年）292頁。
- *^v 『夏目漱石周辺人物事典』（笠間書院、2014年）292頁。
- *^{vi} 森鷗外「夏目漱石論」『鷗外全集第26巻』（岩波書店、1973年）所収。407頁。
- *^{vii} 森鷗外「夏目漱石論」『鷗外全集第26巻』（岩波書店、1973年）所収。407頁。
- *^{viii} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）180-181、205頁。
- *^{ix} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）251-252頁。
- *^x この告白の具体的内容について森田草平は明らかにしていない。しかし江藤淳は森田の著書『煤煙』（本書には森田の自叙伝的著書という一面がある）の内容から、この告白の内容を、森田草平の父、亀松がハンセン病患者であったこと及び、草平はその父の実子ではない疑いがあることではないかと推測している。（江藤淳『漱石とその時代 第三部』（新潮社、1993年）228頁、370-383頁。
- *^{xi} 半田淳子「誰が一番愛されていたか『文鳥』が語る両性愛」、『漱石研究第13号』（翰林書房、2000年）所収、100-109頁。「草平は、秘密を共有するという形で、漱石を独占しようと試みたものと思われる」（108頁）。
- *^{xii} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）253頁。
- *^{xiii} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）253頁。
- *^{xiv} 小宮豊隆『夏目漱石（下）』（岩波文庫、1987年）29-30頁。
- *^{xv} 和辻哲郎「漱石の人物」『和辻哲郎随筆集』（岩波文庫、1995年）所収。157-158頁。
- *^{xvi} 和辻哲郎「漱石の人物」『和辻哲郎随筆集』（岩波文庫、1995年）所収。160頁。
- *^{xvii} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）358-359頁。
- *^{xviii} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）359頁。
- *^{xix} 森田草平『夏目漱石（二）』（講談社学術文庫、1980年）359頁。
- *^{xx} 森鷗外「夏目漱石論」『鷗外全集第26巻』（岩波書店、1973年）所収。408頁。
- *^{xxi} 「明治42年11月28日 寺田寅彦宛夏目金之助書簡」『漱石全集第18巻』（岩波書店、1928年）所収。633頁。
- *^{xxii} 三好行雄『近代文学史の構想』（筑摩書房、1993年）9頁。
- *^{xxiii} 『夏目漱石周辺人物事典』（笠間書院、2014年）459頁。
- *^{xxiv} 久米正雄『風と月と』（鎌倉文庫、1947年）13-15頁。
- *^{xxv} 例えば内田百閒は、1911年2月に東京内幸町胃腸病院に入院中の漱石を初訪問した際、緊張のあまりろくに口を利くこともできなかったという（『夏目漱石周辺人物事典』（笠間書院、2014年）459頁）。ま

た、漱石門下となった直後の芥川も、久米との会話の中で、漱石が自分たちのことをまだ弟子だと思ってくれているという話をしている(久米正雄『風と月と』(鎌倉文庫、1947年)120頁)。

*^{xvi} 『新集内田百閒全集』第七巻(福武書店、1987年)265-266頁。内田の1919年12月28日及び29日の日記に小宮を「漱石神社の神主のようで可笑しい」と評する記述がある。しかし、小宮のことをそのようにする内田自身も、漱石の生前にはしばしば漱石の人格を神格化して捉えていたような節がある。例えば漱石から直筆の書を譲られた内田が、後になって漱石から書の返却を求められた際のエピソードは象徴的である。返却に応じた内田の目の前で漱石が書を破り捨てた際の心境について内田は漱石宛書簡で次のように訴えている。「私は今夕先生が私の持って上がりました書や繪をペリペリと御破りになる御手許を見それからその音をききまして何といふ事なしに無茶苦茶になってしまったやうな心持が致しました」、「こんな事を申すと先生に笑はれそうですが、私は自分の心にわだかまりの出来た時心の落ち着かぬ時、又時には妻と喧嘩を致しました後など幾度か先生の書の前でその書を見い自分の心を取り戻したか解りません。先生の書は私のただの品物ではなくなって居ります」、「私は野蛮人が自分の神を焼棄てられたやうな心持がいたしました。私へ今でも紙の破れる音を思ひますと頭のしんがわくわくする気持ちがいたします」『新集内田百閒全集』第三十巻(福武書店、1989年)160-161頁。「木曜会」内でも漱石門下に加わった時期が相対的に遅い「第二世代」の門弟たちが、漱石との心理的距離を感じていたことは事実だが、他方で彼らの言動の中からも「作家」漱石の偉大さを崇拜する態度は散見される。

*^{xvii} 江口渙『わが文学半生記』(青木書店、1989年)39頁。ここで江口は、漱石の臨終の言葉である「いま、死んじゃこまる」という言葉を、小宮が著書『夏目漱石』の中で故意に削除していると批判しているが、これは誤りである。小宮豊隆『夏目漱石(下)』(岩波文庫、1987年)の315頁には「そのうち漱石が非常に苦しみ出し、自分の胸を開けて、早くここへ水をぶっかけてくれ、死ぬと困るからと言ったかと思うと、人事不省に陥り全く意識を失ってしまった」という記述がある。

*^{xviii} 久米正雄『風と月と』(鎌倉文庫、1947年)120-121頁。

*^{xix} 久米正雄『風と月と』(鎌倉文庫、1947年)122-123頁。

*^{xx} 菊池寛「無名作家の日記」『半自叙伝・無名作家の日記 他四篇』(岩波文庫、2008年)所収。183頁。

*^{xxi} 菊池寛「無名作家の日記」『半自叙伝・無名作家の日記 他四篇』(岩波文庫、2008年)所収。183頁。

*^{xxii} 久米正雄『風と月と』(鎌倉文庫、1947年)256-257頁。

*^{xxiii} 芥川は、当時の東大英文科教員、ローレンスの講義に出席中の率直な思いとして「その退屈さは人間以上だった」、「だんだん眠くなって来た。そこで勿論、眠る事にした。」と述べている(「あの頃の自分の事」『芥川龍之介全集 第4巻』(岩波書店、1996年)所収120頁)。上田敏に関しても、芥川は「あの地位影響する所が広がって、あの地位何もしてゐない人はない。考へると少し気の毒なきがする。その上この間上田さんの『独語と対語』を読んで見て、すべてが甚だ陳腐なので驚いた」と否定的評価を下している(「あの頃の自分の事(削除分)」『芥川龍之介全集 第4巻』(岩波書店、1996年)所収149頁)。

*^{xxiv} 大宅壮一「文壇ギルドの解体期」『大宅壮一全集第1巻』(蒼洋社、1981年)所収。232-233頁。

*^{xxv} 大宅壮一「文壇ギルドの解体期」『大宅壮一全集第1巻』(蒼洋社、1981年)所収。231頁。

*^{xxvi} 泉鏡花「紅葉先生の玄関番」『鏡花全集第28巻』(岩波書店、1942年)所収。740-742頁。

*^{xxvii} 泉鏡花「紅葉先生の追憶」『鏡花全集第28巻』(岩波書店、1942年)所収。835頁。

椎名：「知識人」漱石から「作家」漱石へ

- *^{xxxviii} 里見弴「二人の作家」『里見弴全集第9巻』（筑摩書房、1978年）所収。
- *^{xxxix} 谷崎潤一郎「文壇昔ばなし」『谷崎潤一郎随筆集』（岩波文庫、1985年）所収。269頁。
- *^{xl} 泉鏡花『紅葉先生の追憶』『鏡花全集第28巻』（岩波書店、1942年）所収。835頁。
- *^{xli} 和辻哲郎「漱石の人物」『和辻哲郎随筆集』（岩波文庫、1995年）所収。157頁。
- *^{xlii} 三好行雄『近代文学史の構想』（筑摩書房、1993年）5頁。
- *^{xliii} 三好行雄『近代文学史の構想』（筑摩書房、1993年）9頁。
- *^{xliv} 三好行雄『近代文学史の構想』（筑摩書房、1993年）6頁。
- *^{xlv} 久米正雄『風と月と』（鎌倉文庫、1947年）237頁。
- *^{xlvi} 菊池寛「無名作家の日記」『半自叙伝・無名作家の日記 他四篇』（岩波文庫、2008年）所収。158頁。
- *^{xlvii} 久米正雄『風と月と』（鎌倉文庫、1947年）121頁。
- *^{xlviii} 芥川龍之介「或阿呆の一生」『河童・或阿呆の一生』（新潮文庫、1968年）所収。146頁。
- *^{xlix} 芥川龍之介「或阿呆の一生」『河童・或阿呆の一生』（新潮文庫、1968年）所収。147頁。
- *^l 芥川龍之介「校正の後に」『芥川龍之介全集第1巻』（岩波書店、1977年）所収。408頁。
- *^{li} 久米正雄『風と月と』（鎌倉文庫、1947年）119-120頁。
- *^{lii} 瀬沼茂樹『日本文壇史第24巻』（講談社文芸文庫、1998年）289頁。「有識者の注目を惹いていた白樺派が、次第に実力を発揮し、およそ漱石の去った翌六年に文壇の覇権を握ったとみられる。」

（教育社会学講座 助教）

（受稿 2019 年 8 月 30 日、改稿 2019 年 11 月 11 日、受理 2019 年 12 月 13 日）

「知識人」漱石から「作家」漱石へ

—「木曜会」にみる師弟関係の構造と変容—

椎名 健人

明治・大正時代の英文学者及び作家である夏目漱石とその門弟たちが織り成していた共同体(=「木曜会」)における師弟関係のあり方について社会学的観点から分析する。日本文壇内部における共同体の性質が 1905 年前後を境に硯友社的なギルドから大学教育を受けた人間による知的サロンへとその形態を変化させる中において誕生した文学サロンの一つである「木曜会」は、実質的には 1903 年～1916 年まで機能したが、そこに集まった漱石門弟はそれぞれの世代ごとに異なる特徴を持っている。「木曜会」における師弟関係の構造と変容を分析することによって、アカデミズムと結びつく形で社会的権威を獲得していくに際して漱石とその門弟たちが果たした役割と、後に大正文壇の中心を担った芥川龍之介らの作家たちの文学的野心の起源について明らかにする。

Transition from “Intellectual” Sōseki to “Writer” Sōseki: Construction and Transformation of mentor relationship in “Mokuyoukai”

SHIINA Kento

This study analyzes the mentoring relationship between Sōseki Natsume, a novelist and a scholar of English literature in the Meiji and Taishō Period, and his pupils from a sociological viewpoint. The nature of the community within the Japanese literary world changed its form from a guild-like form to an intelligent salon with university education around 1905. Although “Mokuyoukai”, an intellectual salon by Soseki and his pupils, lasted from 1903 to 1916, members of “Mokuyoukai” had different characteristics for each generation. This study analyzes the structure and transformation of the mentoring relationship in “Mokuyoukai”, and clarifies the role played by Soseki and his pupils in acquiring the social authority of the literary world in connection with academia, as well as clarifying the origin of the literary ambitions of authors, such as Ryūnosuke Akutagawa, who played a central role in the literary world in the Taishō period.

キーワード: 師弟関係、文壇、夏目漱石

Keywords: mentor relationship, literary world, Sōseki Natsume